

國政權に反對する民衆と戦に倦みし兵士等が、果して共產主義擁護の爲め最後迄戦ひ得るやの一點である。

此の點は皇國と雖も大いに戒心を要する所で吾人が本篇に於いて思想戦の國家的統制と之が體系整備の急務を高調せんと欲する所以も實に茲に在るのである。

又蘇國對内政策の失敗に鑑み平戦兩時を問はず爲政者は常に國民全般の利益といふことを考慮し、一部階級の利益の爲め他を犠牲とする如きことなからん事を必要とする。之を要するに蘇國は今や物質的には想像を許さざる程度に向上發展し國防力の擴充せし事亦武力戦に於て述べた通りである。

而して彼の最大の弱點は國民の窮乏と政權に對する不平を藏する點にある。將來戦の決は思想戦にあることを思ひ、速に思想戦體系を確立し國民精神の陶冶と其結束を圖ると共に、彼れの弱點に乘じ最後の勝利を獲得するに足るの施設を講ずるの急務を感ずるものである。

政略篇

其一 外交政略

近代國防より見たる蘇聯邦

四一

帝國主義的世界制覇は、ピーター大帝以來の傳統的國是であつたが、共產露國の國是は其形をこそ變へたれ、依然として武力を背景とする赤化による世界征服に在ることは毫も變りないのである。

世界大戰の戦禍に懲り、澎湃として全世界を席捲した平和及自由主義思想の波に乗つて主傳播された共產主義は一時世界を風靡したが、歐洲諸國に於ては反動的に擡頭した國家て義と佛波及小協商沿バルチック諸邦を連鎖する赤化防衛壁の爲め現在に於ては表面的には壓倒された形である。之に反し東亞に於ては著々として(特に一九二三年—二七年の間)進展しレーニンの揚言した「世界革命は極東に於て決す」の遺訓は漸次實現せられつつある。

試に東亞の地圖を廣げて見るがよい。(卷末附圖参照)

世界大戰の後列國が各、復興に熱中せるドサクサにまぎれ、蘇國は外蒙を赤色に塗り代へ遂に支那より獨立せしめた。中華民國も滿洲國に對する場合と異り飽く迄主權を主張せざる爲に遂に事實上蘇聯邦の一部となつてしまつたのである。楊子江沿岸が夙に赤化の目標となり、一九二七年ボロジンの失脚と共に往時の盛觀はなくなつたが、現にコ

ミンテルンの指令によつて動く四十萬の共産軍が江西省瑞金を支那共産政府の根據として江西、福建、安徽、河南、湖北、湖南、陝西、四川の八省に亙るソウエト地區に蟠居し蔣介石の頭痛の種となりつゝあることは周知の事實である。(註 スターリンが一九二五年一國社會主義建設に方針を變へて以來コミンテルンの對外工作は從來の如く熾でなくなつた。支那本部に於ても同様であるとの説もあるが、彼は決して世界赤化を放棄したのではない。當分自國の赤化に重點を置いて居るの意と解したがよからう。)更に滿洲事變に世界の耳目を集め中華民國亦抗日に夢中となれる間に新疆赤化の魔手は遠慮なく延びつゝある。特に第一次五年計畫により支那西域に添ふて建設せられたトルクシブ鐵道は、經濟的にも政略的にも蘇國と新疆とを更に密接なる關係に置くこととなつたので新疆が第二の外蒙たるは遠き將來ではあるまい。

斯くして民國の中心に根を卸した共産政府と、新疆より内部に向つて進入する共産勢力と握手して南京政府を顛覆する如き事態を招來せば、東亞は累卵の危機に直面する事となるであらう。

斯く蘇國の世界赤化運動は支那に於ては曲りなりにも成功しつゝあるが、前述の如く歐洲及小亞細亞方面は失敗し剩へ資本主義諸國の重壓を蘇り、世界赤化は愚るか蘇國其物の影さへ薄からんとする形勢となつた。茲に於て翻然として覺醒した蘇國當局は先づ

近代國防より見たる蘇聯邦

政權の強化を圖るの必要を痛感し隣邦諸國に對し和睦の手をさし延べ、國內の根本的立直はしを斷行し一は以て經濟的に斷然資本主義國と對等に太刀討を爲し得しめ、一は以て武力的に反共產戰線を排撃し得んが爲め一國社會主義建設と銘打つて茲に五年計畫なるものを立案するに至つたのである。これが爲め外交工作としては五年計畫完成迄絶對に列國の干渉を排除する爲め一時列國と平和状態を保持するを必要なりとし、一九二五年十二月土耳其と不侵略條約を締結したのを手始めとし、一九三三年九月迄に獨逸、ロシアニア、ベルシヤ、アフガニスタン、フィンランド、ラトヴィア、エストニア、波蘭、佛國、伊國の諸國と同一條約を締結し更に一九三三年七月には左記の諸邦と侵略國定義條約を締結した。

アフガニスタン、土耳其、ベルシヤ、フィンランド、エストニア、ラトヴィア
ロシアニア、波蘭、ルーマニア、チエツコスロヴァキア、ユーゴスラヴィア

又一九三二年十二月には支那と、一九三三年十一月には米國との國交を回復し、一九三四年初頭、佛國及英國と通商條約を締結した。就中最も顯著なるは大戦以來仇敵視して居つた波蘭との怨恨を棄て、親善關係に入り、又十六年の久しきに互り斷交状態に

在り而も蘇國不承認の態度を固持せし米國をして、遂に蘇國承認を斷行せしめた事に在る。これは大戰以來の反蘇戦線の爲め手も足も出なかつた苦境時代に比し隔世的の飛躍であつて蘇聯邦外交の大成功である。

外に對しては此の如き平和工作を行ひ、其安全保障の壁の中に於て五年計畫を實施し著々と國力の充實を企圖しつゝ、あつたが、偶、一九三一年九月十八日滿洲事變の突發に際會した。滿洲事變の突發は蘇聯邦にとつては正に青天の霹靂であつた。

皇軍の道義的使命を解しない蘇國政權は風聲鶴唳に驚き急遽五年計畫の一部を改變して軍備の充實を急ぎ、極東に増兵して國境の防備を堅めた。同時に西歐に對する外交工作を更に促進せしめ一方皇國に對しては一九三二年暮不侵略條約の締結を提議し來り、續いて北滿鐵道讓涉を提議して紛糾を回避せんとしたのである。不侵略條約は時期尙早なりとの理由の下に日本の受諾する所とならず又北鐵交渉亦兩者の妥協成らず、茲に於て蘇國側は日本との接近困難と見るや斷然其態度を改め對日積極政策に轉じ、一九三四年三月を以て日蘇開戦の時機と想定し晝夜兼行極東の戦備を急ぎ、一方國民に對しては對日敵愾心を鼓吹し他方歐米に日蘇關係の危機を流布し又日本を好戦國なりとの宣傳を

行ふ等露骨なる政策を採るに至つた。

極東侵略の傳統的政策を持し支那西域の赤化と相俟て滿洲攻略を企圖せる彼が滿洲事變に際し殆ど絶對不干涉主義をとり、皇國の機嫌を損せざらん事に汲々とした事は一體何を物語るか？ これは彼の五年計畫未だ完成せず皇國を對手として一戰交ゆるだけの自信がなかつたからである。最近彼が挑戰的態度を採るに至つたのは、第一次五年計畫完成し極東軍備亦充實し、皇軍と衝突するも差支なき程度に達したるものと妄信するに至つた爲めか、或は皇國が蘇領侵略の企圖なき事を漸く了解し、開戦の危機なきを見越し之を利用して國民に對して非常時意識を鼓吹せんとするの深慮に基づく、其何れなるやは知らないが、我が國民の注意を喚起したいのは今後の彼れの對日動向である。今日迄の蘇國は怨を飲んで雌伏しあるものと見るべく、一九三六年第二次計畫を完成し、皇國が眞の非常時局に直面する時機に至つて、本然の政策に歸り斷然皇國に對し攻勢に轉じ來るべきことである。其時に於て帝國の國防にして缺陷あらんか、光輝ある三千年の歴史は遂に赤鬼に汚瀆せらるゝに至るであらう。

此危機を不侵略條約なり其他の平和工作によつて回避せんとする思想が近時擡頭しつ

蘇聯邦の
國際的不
信

あるが、見方によつてはこれも勿論、不可ではあるまい、が吾人の決して忘却すべからざる事は蘇國は國際的不信の札附者であることである。

平和條約や國際的保障に信倚して國防を忽がせにする事の不可なるは世界大戰に於ける白耳義の例を俟つ迄もなく外交政略の常識であらねばならぬ。

況んや彼は建國當初列國と帝政露國間の既存條約、破棄帝政時代の對外貸借の破棄を犯せる國際的不信の履歷持ちでありブレストリトウスク條約を無視して獨を赤化之を崩壊せしめたる沒義漢であり、コミンテルンと不可分の關係にあつて列國の赤化を實行しつゝ蘇政權コミンテルンの行爲に對しては其責に任ずる能はずと平然として嘯さ得る鐵面皮漢であり、世界最大の軍備を擁し現に盛に軍擴を行ひつゝ壽府軍縮會議に於て白々しくも軍備全廢論を提唱し最近は皇國を誣告すべく北鐵占領の陰謀ありと宣傳する等國際不信に關しては天下御免の國である。

此の如き蘇國を對手として條約に依つて緊張を緩和せんとするも正直なる日本國民の非常時意識の軟化に役立つ以外大なる利益なきに非るか。

其二 蘇國の對日戰備

近代國防より見たる蘇聯邦

四七

滿洲事變勃發以來蘇國が兵力を極東に増派しつゝ、あることは周知の事實であるが、大體に於て二倍乃至三倍に増大したと見て差支なからう。即ちバイカル湖以東に於て事變前には歩兵四師團、騎兵二旅團に過ぎなかつたが、本年三月推定兵力歩兵十師團、騎兵二師團、國境附近にはグ・ベ・ウ軍隊八九聯隊、コルホーズ師團（共營農民たる在郷軍人より成る屯田兵の如き軍隊）二三師團を配置し其兵力總計二十萬内外を算する。

右は師團數の増加のみならず、歐蘇より極東に移駐した師團は全部戰時編制であり、又從來次等の編制裝備なりしものも悉く最新式の優良裝備と代つてゐる。

飛行機は事變前百五十機内外であつたが現在は少くも五百機に達し從來偵察戦闘機のみであつたものが、最近攻撃を目的とする爆撃機を増加し、航續距離二千五百軒を有する超爆撃機は數十機を算してゐる。東京浦鹽間の直距離は約千百軒であらから東京、大阪を裕々爆撃して歸還し得る能力あるものである。

戦車は事變前極めて小數であつたが、現在は少くも六百五十臺を有し其外に装甲自動車約三百五十臺を有して居る。

蘇軍の化學戰即毒瓦斯の裝備は世界一であるが、極東軍もこの裝備を有する事勿論で

あつて、最近米國方面より盛に鹽の輸入を爲しつゝあるは毒瓦斯製造に充當しつゝあるものであると言はれて居る。蘇滿國境の要地即ちポクラニチナヤ對岸、松花江と黒龍江との合流點、ブラゴエシチエンスク及滿洲里附近には國境に添ふてトチカと稱する臨時要塞とも見るべき鐵筋コンクリート製の永久堡壘を盛に構築中である。又革命以來放任して顧みなかつた浦鹽要塞を修築し、アメリカ灣方面には新に砲臺を築造中である。

浦鹽港には一隻の軍艦も浮んで居なかつたが現在は數隻の潜水艦を有し更に十數隻を組立若は建造中である。

右の兵力を見るも既に我が在滿兵力の數倍に達し、皇軍全兵力に比しても甚しき遜色なき程度に達しつゝある。蘇國は之を以て満足するなく更に飛行機、戰車、裝甲自動車等を續々歐蘇方面より輸送中である。

從來極東と歐蘇とを連絡するシベリア鐵道は單線であり、一日數列車を運行するに過ぎずして大軍の兵站線路としての能力十分でなく、日露戰役當時一方向への集團運行によつて、辛うして百萬内外の兵力を維持し得たに過ぎなかつたが、現在に於ては複線工事著々として進捗しザバイカル鐵道の複線工事は既に完成しシベリア線亦全線複線化せ

ば其輸送能力は倍加すべく又ウラル、カズネツツの重工業は極東戦争を遂行する爲め今や遺憾なき程度に進展しつつある。一部國民に不平あるも獨裁政權は必ずや慰撫、抑壓の兩手段を以て之を引摺り行くべきは既に述べた通りである。

五〇

國境築城を以て彼は日本の侵略に備へんが爲めの防禦手段であると主張するであらう。然し戰術常識の一片でも嚙つて居る者はかゝる言に欺かれぬ。滿洲に在る僅に數師團の皇軍が十師團の大兵を擁し而も之を直ちに増援し得る七十六師團、百三十萬の大兵を有する蘇軍に對し何の必要があつて攻勢をとるや、我が國軍の全兵力を以てしても僅かに全蘇軍の四分之一にも達しないではないか、寡兵を以て蘇滿、中滿の二正面に對する廣大なる正面を防衛せねばならぬ皇軍こそ國境要塞を必要とするのではないか。考へて茲に至れば彼れの國境築城は獨佛國境要塞の如く、先づ之に依つて蘇軍の集中を掩護し、之を據點として滿洲進入を企圖する爲め重要な價値を有するものなることは、恐らく辯解の餘地あるまい。況んや攻撃を唯一の目的として建造せられたる超重爆撃機を有するに於てをやである。開戦劈頭彼は滿洲朝鮮は言はずもがな、東京大阪の上空に現出して爆撃を行ひ又潜水艦は近くは日本海、黄海、遠くは太平洋に迄も出没し大陸との

交通を遮断し我が通商妨害の舉に出るであらう。

加ふるに最近蘇國陸軍大臣、或は極東軍司令官等の對日挑戰的演說訓示等はさなきだに緊張せる赤軍將兵の闘志を愈々熾烈ならしめつゝある。

斯く觀察し來れば極東のみならず蘇國全軍の對日戰備は之を日露戰役直前のそれと比較せば、其規模と云ひ眞劍さと言ひ舉國一致的の點と謂ひ雲泥の差ありと稱し得る。

北方に此の脅威あり、東方に太平洋及支那大陸制覇の野心ある米國あり、西に皇國の眞意と亞細亞民族の大使命を解せず、以夷制夷の政策により自ら亡國の道程を辿りつゝある老大中國あり、吾人の前途愈々多事にして愈々憂の天なるを覺ゆるものである。

結 言

以上を以て吾人の言はんと欲する處を略々盡した。蘇國の對外政略は帝政露國時代のそれと毫末の變更を來さざるのみか、却つて内政に外交に經濟に武力に、革命當時の窮迫せる蘇國とは打つて變つた更生の蘇國として出現し、資本主義列強に對する陣營全く成らんとし、從來の蟄伏陰忍の政策より蟬脱し列強の經濟的、政治的危機に困癒せる隙に乗じ本來の積極政策に還元して猛然として立たせ